
神の追憶楽曲

白乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の追憶楽曲

【Nコード】

N5280V

【作者名】

白乃

【あらすじ】

ある日、ディオスという名の少年は、何者かから逃げているというフィルティーンに出会う。が、彼はただの脱走者だった。

彼の保護者兼物凄く頼り無さそうな（ぶっちゃけ間抜け）ローレルと共に、ディオスは仕方なくフィルティーンを探すことになり――

此方は携帯サイトの小説を少し加筆修正したものです。↓携帯サイトはブログ（PC）サイトに閉鎖移転しました。

壱 それは誰かの悪戯（前書き）

残酷な描写といっても軽いものです。読む人にとってはそう思われ
ないかもしれません。

壱 それは誰かの悪戯

お願い目を向けて。
逃さないで

光が嫌いな少年が居た。

朝は光を生み、光は少年を起こしてしまうから、朝も嫌いな少年が居た。

少年は薄い銀の髪で、一束長い髪を左で中途半端に三つ網にしていた。

容姿はすらりとした細身の長身。紺色のロングコートを着ている。

名はディオスと呼ばれていた。ディオスはこの世界の東の大陸にある、グラン＝バーネという街の外れに住んでいた。

家族は母一人。他に兄と父が居たが、戦争で死んだ。

まだ幼かったディオスは戦争に駆り出される事はなかった。

グラン＝バーネは水神の街と呼ばれるほど水が豊富な上、水質もとても良い。

移動手段は車より水路の船の方が多い。

「……」

そんな美しいグラン・ベエネを眺めながらディオスは大きなため息をついた。

性格にはそこに居る人間達を見て。

ディオスは世界なんてくだらない無駄の塊と考えていた。

だから、くだらない世界で生きる事が嫌になっていた。

けれど、それは同時に死を意味する。死は怖くは無かった。けれど、嫌だと思いつつ、其処から逃げられない自分がどうしようももどかしかった。

死にたくないのに死んでしまった家族を見て。だから、自分から投げ出すことはいけないと頭では理解している。けれども、

「……何で」

いや本当は、と、記憶がフラッシュバックする。

『——1人なんて——……』

ぶんぶん頭を振ってディオスは記憶を無理やり押し込めた。

「……くだらない」

そう呟いて、嫌々体を動かし部屋を出た。

ディオスがリビングへのろのろと向かうと、ディオスの母がにっこりと笑っておはようと言った。

「……おはよう……」

ぶっきらぼうに返事をするそのままディオスは家の玄関へ向かった。

「あら。どこか出かけるの？」

「……………」

ディオスは何も答えないで外へ出た。

外へ出ると朝の心地よい風がディオスを包んだ。

しかし、ディオスはそれさえも鬱陶しそうにすると、小丘の上に立つ家を後にした。

町へはディオスの家から300〜400mくらい離れている。

何処かへの当てもなく、ディオスは丘をブラブラ歩いていた。

初めは暇な時間を潰しに、町へ行こうとしていたが気が変わったのである。

ディオスは相当気まぐれだった。

家にいるとまたろくでもないことを脳が掘り起こしそうなので家に帰るのには気が乗らない。

ディオスがさて何処かへ行こうか、しかし行く場所がないならいつそ開き直って帰ろうかと思ったとき、案外近くから急に足音が聞こえた。

「！？」

歩調音からして10代だろうとディオスは推測する。

気が緩んでいた所為だろうか、気配もなかったので此処らへんに居る賊かと思い、軽く身構えた。

（あー…剣…もってくるんだった…）

剣はなくともディオスは体術を少しは身につけているので、もし本当に賊なら力でねじ伏せるつもりだった。

今も絶え間なく10代の子供の足音と、草のカサカサという音が聞こえている。

（子供までも賊をやるのか…。本当上の大人は残酷だな…）
子供に襲わせる。今では割と珍しい事ではなかった。

まだ子供だから、法で裁くことは出来ない。よって賊が捕まる事は無い。

例え居場所を子供が喋っても其れより速く賊共は全て移動しており、簡単に子供を見捨てる。

だから近年孤児が増えて来ている。

（たく…面倒くせー……）

そうディオスが思った直後、「わ…!!」
ディオスの背中に鈍い衝撃があった。

（何だ…!?!）

半ば反射的に後ろに振り返った。

其処に居たのはディオスの思った通り、子供だった。
しかし、

「いたたた…え、えつと…あの!……う…ごめんなさい…です…」
其の子供は賊ではなかった。身なりからして見て取れる。

大抵族の子供はみすばらしい簡素な服を着ているのに対し、其の子供は何処か貴族の様な服を着ているし、装飾品も身に着けていた。

「怪我は…ないですか…?」

「……ん? ああ……」

「良かった…ですー…。えっと…本当にごめんなさい…。此方の不注意でぶつかってしまつて…少し…急いでいたもので…」

其の子供は何度も頭を下げた。

其の行為から、賊ではないという核心が持てる。賊の子供はそもそも礼儀作法さえ知らないのだ。

「……急ぐ…?」

其処で、急ぐという言葉に引つ掛かったディオスは其の子供に聞いてみた。

子供は「え?」という顔をした後直ぐ答えた。

「……………ていたから」

「……?何だ?……すまないがもう一度言つてくれ」
其の子供は改めてディオスを見るとはつきりといった。

「追われていたから」

「…え……?」

一瞬ディオスは反応に遅れた。

「一体何に」というよりも「何故こんな子供が」の方が強い。

——追われる…それは余程の罪人か何かでない限り、子供が追われることは無い。

「如何してつて…思つてるでしょ。でもねー…うーんやっぱり言えない」

ディオスに言つたというよりは自分に言い聞かせるように呟いた子供はにこりと笑つて言い、はつと思いついたように手を叩く。

「そうだ…貴方…のお名前、聞いてもいいですか?」

「俺……俺はディオス」

「ディオス……さん……。僕はフィルティーン。フィルティーン＝キリ・キュイアリーム」

長……とディオスは思った。近辺の国では貴族で無い限り性は無い。

なら此の子供フィルティーンは近辺の者ではない事になる。

しかしディオスは直ぐに考えを否定した。

（なら……こんなところでうつく筈が無い……）

貴族の子供は庭は愚か城からも殆ど出ないと聞いたことがある。つまり、消去法でフィルティーンは何処か遠い、他国の者と推測できる。

「……じゃあ、ディオスさん。ごめんね、ぶつかって。僕は急ぐから、ディオスさんも気をつけて」

フィルティーンはもう一度頭を下げて踵を返して走ろうとした時だった。

不意にフィルティーンは足を止める。

「……？どうした……？」

不審に思ったディオスはフィルティーンに駆け寄った。
急いでいたんじゃない……と口にした時だった。

どんつ。とディオスに鈍い衝撃が走る。

急な事に対応が遅れ、フィルティーンに突き飛ばされたのだと気付いたのは地に手についてからだった。

「……！？一体何——……？！」

ディオスは直ぐ立ち上がり、疑問を口にしようと口を開きかけた

が、直ぐに口を閉じた。

グンッグンッ…と音を立てて現れた「其れ」を目にしたから。

フィルティーンを取り囲んでいるのは白い服を身に纏う物達だった。

黒ではなく、本当に真っ白な服だ。形はローブに近く、それぞれバラバラであった。

そしてどの人もフードを深く被っている。

ディオスには何が起きたのか分からなかった。

彼らが何処から現れたのか、何者なのかさえも。

貳 白き人の探し物

ディオスは其の場から動けずに居た。と同時に、先程あつた少年、フィルティーンを囲む純白を身に纏った者達から目を逸らせずに居た。

人数は多くない、目に見える人数なら四人だ。丁度正方形を描くように彼らは立っていた。

立っていたというのもおかしいかもしれない。何故なら其の四人は地面から十数センチ浮いていたのだ。

其の場から動けずとも、ディオスの思考は驚くほどクリアだった。此の人達がおそらくフィルティーンの言っていた人たちだろう。

それから長い時間ディオスはそうしていた気がする。気がするというのは、其れはあくまで体感時間であつて、実際の時間とは異なるかもしれないからだ。

そして、時を最初に動かしたのは純白を身に纏った中の一人だった。

「やっと…追いつきました…」

其の声は妙に透明感のある、青年の声だった。

そして直後ディオスの目の前に居る別の者が続けて言った。

「さあ、もう観念してお戻り下さい、王子!!」

「……」

はじめ、ディオスは何を言ったのかが理解できなかった。

フィルティーンが妙に深刻そうに言っていたからだろうか、命でも狙われていると思っていた分、其の言葉には不意打ちを食らった。

「……お……うじ……?」

普段そんなに動揺を表に出すことは無いディオスだが、此れは流石に動揺したようだ。

やっとのことで出した言葉が「其れ」だった。

其の小さな呟きは、純白達にも聞こえたらしい。

ゆったりとした、何処か優雅を思わせる素振りディオスの方へ振り向いた。

その瞬間、隔てるように小さな風邪が彼らの間をすり抜けていった。其の風にディオスの近くに居た一人のフードが空を舞った。

其の中から出てきたのは…

「……え……」

これまた何もかも真っ白な人間だった。

人間という言葉は語弊があるかも知れないが、ディオスが見た限

りでは、人間と見た目は然程変わらない。あくまで見た目の話であるが。

ただ、上から下まで真っ白ということと、其れはまた人とは思えない程綺麗な容姿をしているということは何処か人ではない気にさせる。

目の色に限ってはこれまたとても色素が薄い。

いや、瞳まで白だった。

色はあるのかもしれないが、白以外デイオスには思い浮かばない色だった。

そして、其の表情は何処かとても幼いように見えた。

初めはとても大人っぽいイメージを持ったデイオスだが、今改めてみると目の前の純白はデイオス自身と差ほど年は離れてないように見える。

精々同じ年か、其れより少し低いくらいだろう。

「誰…ですか…？」

デイオスも勿論だが、其れと同じくらい、目の前の純白は困惑しているように見えた。

如何やらデイオスに気付いていなかったようだ。

「…俺は……」

言い掛けてデイオスは途中言葉を濁らせる。

見ず知らずの、フィルティーンを追うと言う彼らに名乗るのは少し躊躇われたのだ。例え、相手がどんなに悪人に見えなくても。

其れは元々のデイオスの性格だからだろうか、いや一般的に考えても普通の行動ではある。

敵かもしれないという可能性を抱いたまま、みすみす自分の情報をくれてやるほど、デイオスは自分が堕ちたものとは思っていない。

声の無いままの沈黙が暫く過ぎた。

実際そんな時間は経っていないのかも知れないが、ディオスにはとても長く感じられた。

緊張と重い空気が切り詰めた中、風の音だけが其処に変わらずにあった。

風が頬をなでる感触は、目障りなものではなく優しく包む様な感じであり、其の感覚がディオスの緊張を和らげてくれている様な気がした。

其の風に励まされるように、また、この沈黙を破るには名乗るしかないなと覚悟を決めて静かに言った。

「俺は…さっき偶然そのフィルティーンとであつた…此の街の者…ディオス…だ」

そう告げると目の前の純白は安心したようにほっと胸を撫で下ろしていた。其の表情から困惑は消えていた。

「そうですか。済みません、吃驚させてしまつて…」

そういつと目の前の純白は地に降り立った。

そしてディオスに向き直ると一礼した。ディオスもつられて頭を下げると、目の前の純白は自己紹介を始めた。

「初めまして、ディオス様。わたくしはレイの楽園の者、ローレルと申します」

「レ…イ？の楽園…？」

ディオスはローレルと名乗った目の前の純白の言葉の中に聞きなれない単語があり、顔を顰めた。

レイの楽園。聞いたことが無い地名だったのだ。

「聞いたことはありませんよね、わたくしも今日は初めて此の地

を訪れました」

「初めて…？此の大陸が？」

其れは初耳だった。思わず言ったようにディオスは目を少し見開いた。

何故なら、ディオスの住むこの東の大陸は人の生まれ故郷といわれている、聖地がある。

此の世界に住むものは必ず生まれたときに此の地を訪れ、此れからの人生の安泰と幸福を願って聖地で祈りを捧げる。

そういう決まりが此の世界にはあった。

だから、聖地がある此の地を訪れていないというのはありえない話だった。

「ええ…。話せば長くなるのですが…如何しましょう…って！」
其の時初めて気がついたというようにローレルは急に大きな声を出した。

「……？何だ…？」

ディオスは慌てた様子のローレルに不信任を感じ、如何したのかと訊ねた。

ローレルは眉毛を八の字にしながら泣き付く様な声でぼそりと言った。

「王子が居ません」

ローレルはそういつてディオスの服の裾を掴んだ。

それは暗にディオスも逃がすかと言っていた。一緒に探せということらしい。

「…フィルティーンか…そういえばあいつ、御前等から逃げてい

「たんだっけ？」

「……等……？わたくしのほかにも王子を追うものが……?!」

確認する様にディオスが口にした時だった。御前等という言葉にローレルは反応した。

ローレルの表情はすぐさま真剣なものへと変わり、ディオスに真相を問い質す様に服を更に強く引張った。

「え……其処の三人だよ、御前の他の」

「は……い？……ああ……なんだ……」

他の三人と聞いて、ローレルは再び安堵の息を漏らす。先程の真剣さはもう微塵も感じられない。一体なんなんだとディオスが思った時だった。

「アレは、僕の作った幻影です」

何時の間にか一人称が僕に変わっていたローレルはぱちんと指を鳴らす。

如何やら僕の方がローレルの本当に一人称らしかった。

そしてぱちんとなった音を合図として、周りに浮いていた三つの純白たちは霧の様に消えた。

「……幻影……」

「其の方が逃げ場なくなると思って……でも……やっぱり……」

其の言葉の続きを、ローレルは言おうとしなかった。言葉が途中で途切れる。

ローレルはがっくりと頭を下げ、其の場に手をついた。

見えない口元から盛大な溜息がはかれたが、ディオスは如何反応しているのか分からず其のままローレルを見ていた。

このままローレルを置いていってもディオスには何にも害は無かったが、ディオスが話をさせていた、其の所為でローレルが探して

いたフィルティーンが逃げてしまったと考えると、少し後味が悪かった。

それに、逃げようにも今だローレルの手はディオスの服の裾を少し掴んでいた。

ディオスもローレルと同じ様に溜息をつくと、ローレルの前に手を差し伸べた。

「……？」

目の前に差し出された手を見てローレルが首を傾げた。

「早く立てよ。俺も一緒に探してやるから……」

「……！！本当ですか！？あ、有難う御座います……！」

そういつてローレルはぱつと表情を明るくすると、ゆっくり立ち上がって再び笑みを浮かべた。

離さない様になっていたのは誰だと言いたかったディオスだが、黙っていた。

さて、あいつは何処行っただ？とディオスは考えながら空を仰いだ。

参 白い人々の住まう場所

ディオスは兎に角街へと向かった。丘を駆け抜けていく。其の後に
をへろへろとしながらローレルがついてきていた。

「ま…待ってくださいーい…ちょっと…つかれ……」

「何を言っている。あいつを探すんだろう？」

といいつつもディオスは少しだけ速度を緩めた。しかしディオスを
を見失わないようにするのが必死なローレルには然程変わらなかった。

といつても此処はとても見渡しのいい丘の上。其れさえも見失い
そうになる程ローレルには体力が無かった。

「そうです…けど！何故…何故街へ…？」

「…木を隠すなら森の中」

「……！つまり人を隠すなら人の中……！凄いです！ディオスさん
……！」

ディオスは内心普通の思考だろうと思いつつ駆け抜けていった。

街へはおそらくディオスだけなら直ぐに着いたと思う。しかし思
わぬ御荷物の所為で然程速いとは言えなかった。

先に街に着いたディオスの後を走ってくる御荷物の姿があった。

「デイ…オス…さーん……！！」

息を切らしながら御荷物もといローレルが歩いているのかと言
いたい位の速度でディオスの方へ向かってきた。ディオスは其の姿を

確認すると、盛大な溜息をついた。

其の溜息を確認したローレルは少しだけ口を尖らせて切らした息を整えながら言った。

「む…溜息をつく…シイが逃げますよ…！」

「…あ？…し…い？…？」

さも当然の様にローレルはディオスに聞き慣れない単語を口にしていた。あまりにも短い単語だった為、ディオスは自分が聞いた物であっているのか不安になった。

しかしローレルは聞き直したディオスの方が不思議だというように首を傾げた。

「『シイ』ですよ？…知らないんですか？」

「ああ…聞いた事が無いな」

やっと呼吸が整ってきたらしいローレルはディオスに逆に質問した。ディオスは其れを肯定しながら、

「呼吸が整ったなら早く入るぞ」

「…あ、はい…！」

如何やら街の前で止まっていたのはローレルへの、ディオスのそれなりの配慮だったらしい。

其れに気付いたローレルはディオスに気付かれない位に口元を少し緩めた。

「『シイ』というのは『レイの楽園』の言葉なんです」

「…もつと一般的なものを使い。そもそも前も言ったがレイの楽園も知らない」

街に入って間も無く、ディオスとローレルは話しながらフィルテインを探していた。

大体、人が物凄く多い。其の中から一人の少年…を探すのは困難

を極めた。

加え人が多い所為で探し回るのも一苦労だった。歩いて探す…其れが限界だった。

其の合間にフィルティーンを探しながら、ローレルは先程ディオスが疑問を持った『シイ』について話していた。

「じゃあ…『レイの楽園』から話しますね…。えっと。レイの楽園は…元々は聖地のモデルなんです」

「……は？」

「聖地のモデルとなった地です。いえ…そもそもレイの楽園はこの世には存在しない筈の地なんです」

「……」

思わずディオスは足を止めていた。僅かに驚いた表情をしながらローレルを見つめる。其の表情は然程変わっていないが内心は相当驚いているだろう。

もしかして、とんでもないやつと関わってしまったのか、やつぱりこいつはここにおいて帰るべきかとディオスが思い始めた。しかしそんなディオスに気付かずローレルは続ける。

「レイの楽園は…神々が住まう場所…と此処では伝えられている筈です。ですが悠久と共にレイの楽園は此の地で廃れてしまったようです…聖地の信仰だけを残して…」

其の瞬間ローレルは悲しそうな、寂しそうな…そんな表情を見せた気がした。

「……そして…レイの楽園は…ええと。何て言ったら良いんでしょう、一応あるところは…」

其処でローレルは立ち止まったまま、レイの楽園があるとされる遠い場所を指差した。

其処は、

「上……です」

ローレルの指した場所は空だった。何処までも続く、綺麗な薄い青色の空だ。

「

……」

そういう性格だからディオスは取り乱すことはなかった。だが、暫くフリーズした。無理も無いだろう。普通信じろと言う方が無理な話ではある。

其の間やつぱり逃げた方がいいのかとも考えた。頭がおかしい奴かそれとも色んな意味で危険なやつか。

しかしどつからどうみてもローレルはただの間抜けにしか見えな
いし、フィルティーンは普通の子供だった。そして言っていること
は何となく嘘とは思えなかったし、乗りかかった船だと思って、割
り切ることにした。

それかもつと信じられなければ夢だと思えばいいんだという考え
に至ってしまえば、少し落ち着いてきた。

ローレルの指差した空を見ながらディオスは口を開いた。

「……じゃあ……御前は死んでるわけ？死んだ人間は天国へ行くと
か行かないとかが一般論だし」

「……少し違いますね……此処で言うなら元々『死んでいる』です。
しかし其れは僕たちにとっての生誕なんです」

つまりは、此処の世界風に言うなら元々死んでいる状態でローレ
ルたちは生まれてくるらしい。

しかし、レイの楽園の者にとっては其れは死んでいる状態ではな
いとローレルは繰り返し呟いた。おそらくディオスが無言だったか

らだろう、分かり難いのかなと思ったらしい。

しかし、ディオスは無言のままローレルに先を続けるように示した。

「そして…レイの楽園の者は定期的にこちら側に来ます。僕たちは其れを『告知』といいます」

「…告知？何を…」

「此処での意味とは少し違って…。…稀にこちら側で生まれてくるんですよ…レイの楽園の者が…」

「……え？」

ディオスは思わず疑問符を口にした。ローレルはそろそろ先に進みましようと呼びかけて、歩きながら話を再開した。

「神様は、自分の手元に置くものを、純血でお固めになりました」
ローレルは歩きながら話を続けた。ディオスはフィルティーンを探しながらその話を黙って聞く。

「それは…神様は知っていたんです。自分は、人とは違う存在だと。たとえ同じ身体を作りを見せても、決して人の輪に交わることは神でさえ、許される事ではないのです」

「…何でだ？世界を作ったのは神だろう…？」

「ええ、そうです。此の世界は神様が御創りになられました…」

しかし…此の世界は完全ではない。故に神様の力は急激な成長を遂げた人間全てに届くわけが無いんです…」

「……成長…」

「これからももっと成長するでしょう、科学という名の悪魔、が」
「科学…か…そういえばどんどん飛躍的に進んでいるもんな」

ディオスはそういうと街を見渡した。其処には建物が並ぶ、ディオスたちにとっても普通の日常があった。

「……科学は神様の力を貪ります。科学に目を盗られた人間は、神様が見えなくなるんです…忘れられてしまったら居ないも同じ…」

「……信仰者もどんどん減っている…と聞いている…」

ディオスの言ったことは真実であつた。生まれた時は皆、此の地で祈りを捧げるのは今もまだ根強い。

しかし、肝心な…祈りに通うという行為をするものは年々減っているらしい。ディオスも其の一人である。

「だから…こそ、神様は人の輪に入ることは出来ません。神様を見なくなった人々の世界は…あまりにも不完全で…力の強い…完全な存在である神様が手を入れることさえ…世界は耐えられないんです」

「…完全…？…ならその完全な力で世界を修復することは出来ないのか…？」

とつさにディオスはローレルに聞き返していた。完全な神様なら、不完全を直せるのでは、という疑問が出来たのである。

ローレルは其れを聞いて苦笑しながら言った。

「此の世界は…ようは植木鉢と同じです。水という生命の育みを与えることは出来ても…例えばチューリップの苗からユリを咲かせようとか、出来ないでしょう？」

「……其れは…そうだが…」

「此処も同じなんです。神様が手を加えられるのは生命を与えるだけ。其処で生きて、どの様な生を送るのかは其処に生きる人間次第なんです」

其処まで言うと、ローレルは天を仰いだ。其の瞳は天高い、レイの樂園に向いている気がした。

「だから…輪に入ることの出来ない神様は…人と関わりをもてない…だから自分の力で創った者をそばに置いた…其れが、僕たちレイの楽園の者です」

「…その…レイの楽園の者が…此処に…？」

「そうです…其の力を宿した子供が…どうしても出てきてしまうんです…。力が弱った神様は…全て管理できなくなってきた…。だから、定期的に僕たちのような者が来て、神の力を持つ者を連れ戻しに来ます。此れが『告知』…です」

神様の信仰がだんだんなくなってきている今、神様の力はどんどん弱くなっている。其れに伴い神の力を持つレイの楽園の者が、此方にも来てしまう事がごく稀にある。

其のレイの楽園の者が此方の世界に永く居て、強いかわりを持つてしまうと、僅かな力とはいえ神の力を宿したその人に世界が耐えられなくなってしまうらしい。

其の為に、此方に来たレイの楽園の者に自分は何なのかを認識させる。

其れが告知、というわけだ。

ディオスは其の真実を聞いて暫く黙っていた。
何を言ったらいいのか、思いつかなかった。

「でも…僕たちは…えっと、逃げた王子を連れ戻しに来たので…今回は告知じゃないんですけどね」

にへらと笑ってローレルが言った。其の表情は何処か寂しさをも感じさせた。

しかし、直ぐに笑いなおしてディオスの手を引いた。

「さあ、探しましょう！詳しいことは、またあとで……で！」
改めてローレルがそういうと、ディオスもそうだなと頷いた。

人々の多い中、あいつは今、何処にいるんだろうか。

参 白い人々の住まう場所（後書き）

おまけ

「で、結局シイってなんだ？」

「あ、ああ。そうですね、此方で言うと…幸せとか幸福でしょうか？」

「…ああ、ただの虚言か」

「きよ、虚言！？酷いですね…！！」

ここまで読んでくださり、有難う御座います！

神の追憶楽曲は全九話の予定です。宜しければ最後までお付き合いいただけたら嬉しいです。

肆 黒い渦

「ちくしょー…全然見つからない…」

ディオスは人を掻き分けながらレイの楽園の王子らしい、フィルティーンを探していた。

しかし、何分人が多すぎる。やはり其処から一人を見つけ出すなんて可能なのか。そもそもディオスの読みは当たっているのか。其れさえも分からないままディオスは何時の間にかフィルティーンを一生懸命に探していた。

人の多さゆえ、ローレルとも離れたら再会するのは困難と思われた為、手分けして探すことが出来なかった。

其の所為か探すことは予想以上に手間取った。

何故再会場所を指定しないかと言うと、ローレルがこの町の店や銅像等、目印になるものを知らないからだ。

教えても町の道など知らないローレルが其処に辿り着けるかと言ったら、まず無理だろう。

そう思ったディオスは不本意ながら二人で探していた。

「たく…何で今日はこんなに人が…」

「知りませんよー僕が知ってるわけ無いじゃないですかー」

「其れもそうだな。知ってたら怖い」

ディオスはそういうと通りから外れて路地裏へ向かった。

その間ローレルは何処へ行くのか分からないと言うような表情で

ディオスの後を追った。

路地裏に入って直ぐの所でディオスは足を止めた。

「如何したんですか？」

「いや、これ以上がむしゃらに探しても無駄だと思ったんだよ」

「其れもそうですねー」

ローレルはそう言いながら今まで歩いてきた道をちらりと横目で見た。

其処には沢山の人が通りを歩き回っている。

「……何時もこんな感じなんですか？」

「いや……。こんなことは……年に一回……あ」

ディオスはローレルの言葉に否定して、この状況をローレルに話した時だった。

不意に何かを思い出したようにディオスははっとする。

「……何か？」

「いや、思い出した。神託だ」

「神託？」

ローレルは聞き返したが、直ぐにあ。という声を漏らす。

「そうか……神の審判のことですね」

「神の審判かどうかは知らないが……オレたちは聖地の巡礼に行くことの出来る神聖な人物を選ぶことを……神託と呼ぶ」

「僕達は其れを神の審判といってますけどね。なんせ其の人物は神の地を踏むことが出来る、トクベツな人ですから」

一口に巡礼といっても、ローレルが言うように普通の人がやる巡礼とは異なる。

神託を受けた巡礼する神聖な人は、聖地に足を踏み入れるだけでなく、其の奥に眠る、祭壇へと足を運ぶことが出来る。

普通の人は、其の地を汚すことを許されておらず、聖地に入つて直ぐのところにある門までしか入ることは赦されない。

「其の神託が…行われる日だ。今日は」

「そう…でしたね…！王子に氣を取られて忘れてました」

「だからだ、こんなに人が集まっているのは…！」

ディオスはもう一度辺りを見渡した。其処には人があふれかえっている。

巡礼をしない一般の人でも、神託には選ばれたいと思う者は多い。何故なら其れは、神の加護を受けるということ。つまり、人生の繁栄を約束されると言われている。

だから、人々は今か今かと神託を待ち、自分が選ばれることを心の中で祈っているのだ。

「虫が良い奴等…」

「…え？何か言いましたか？」

「いや。何でも。其れよりフィルティーンも土地勘は無いんだよな？」

「ええ、ありません。王子も…此処へきたのは初めての筈です」
其れを聞いてディオスはそれなら、と少し考えた。

「…フィルティーンはここに居るかもしれない…」

「え、何故…」

「考えるまでも無いだろう。こんな人が居たら…此の町を知らない御前ならどうする？」

「人が居ないところを……あ」

ローレルは言いかけて思いついたらしい。

フィルティーンもローレルと同じくレイの樂園の人であり、其上此の町に接点はあらず、初めて来たも同然。

もし、此の町に居るのなら、路地裏に居る筈のでは、と考えた

のだ。

「ま。あえて人にもまれそうでもありそうな奴だが――」

「やっぱりディオスさん。凄いです！」

ローレルディオスの眩きを無視して感激して目をきらきらと輝かせた。ディオスは小さく溜息をつきながら、路地裏の奥へと進み始めた。

路地裏は通りの人の声が遠くに聞こえるのと、店の室外機か何かの機械音が少し聞こえるだけで、案外静かなものだった。

通りは五月蠅すぎるな、とディオスが考えていた丁度そんな時だった。

「…怖いすね…」

ローレルが怖いと言ったのは。

「は？」

「こついうところは野蛮な不良共が出てくるのでしょうか？」

「…まさか。そんな漫画みたいなこと……」

そう言ったディオスの言葉が不意に途切れた。

「……」

「…ディオスさん、その…まさか…」

「…その、まさか。だ」

ディオスがさういうと、今まで自分達しか居なかったはずの路地裏に人影が現れた。

「……」

「…へっへ…馬鹿な奴等だな…！」

其の人物は斧の様な武器を持ち、ディオスとローレルを一瞥した。ディオスは全く動じず自分よりも一回りも二回りも大きな相手を睨みつける。

「こおんな所でうろつきやがって…襲ってください何ていったんのかあ？」

ディオスの目の前の人物がそう言った瞬間、同じ様な出で立ちの、武器を持った者が数人姿を現した。

それでもディオスは表面上、全く動じていなかったが、内心少なからず焦っていた。

武器さえあればこんな奴等は直ぐに片付けることが出来る。しかし、ディオスは今運悪く武器を何も持っていない、丸腰だった。加え相手は武器を持っている。

多勢に無勢、逃げることはディオス一人だったら辛うじて出来たかもしれないが、今はローレルが居る。

其れは無理だと思われた。

（ちくしょー…今日は神託の日だからって…居ないと思っていたんだが…）

そうディオスが考えているうちに彼等は確実に距離をつめる。其の様子は金目の物を頂く。其れしか頭の無い獣のように思われた。

（金なんてもってねっつの……けどこうなったら…）

ディオスは決心を決め、後ろにいるローレルに小さく呟いた。

「おい」

「…？何でしょう…」

「オレが囹になる…其のスキに…逃げられるか？」

「え…」

「此処を真っ直ぐ行けば通りに出られる…。オレが…あいつ等の注意をひきつけるから…其のスキに…」

ディオスは気付かれないように小さく指差した。ローレルは其れを目で追う。しかし、ローレルはうんとも言わない。

「…？」

「…駄目です…」

「は…？」

ディオスがローレルの言葉に首を傾げた時だった。奴等の一人がディオスの眼前にまで迫っていた。

「…っ…！」

「は、精々俺等に金寄越してくたばりな！」

そう言つてディオスの目の前の男はローレルと引き離す様を持っていた剣を振るつた。

「…！今…だ！」

其れはディオスにとって好都合だった。さらに幸いにも奴等はディオスしか見ていない。

ローレルは戦力外と思われ、後でも片付けられると思われたらしい。

ディオスは今のうちに、と目で合図を送るが、ローレルは振るわれた剣をよけたつきり其の場から動こうとしなかった。

そして、ローレルは顔を上げると、怒つたような表情で叫んだ。

「出来ないと言いました！当たり前でしょう…！ディオスさん、一人置いて…怪我させるような真似、僕には出来ません！」

「…なっ…！」

其の言葉を聞いてディオスだけでなく奴等も吃驚したらしい。其の場の視線がローレルに集まる。

「…こんな雑魚…ディオスさんが囷になるまでも無いんですが」
ローレルは其の口調からは想像も出来ない程黒い笑みを浮かべて奴等を挑発した。

勿論、奴等は反応した。

「なんだと…糞餓鬼…!!」

奴等の内の一人が言った其の言葉が合図となったらしい、奴等は一斉にローレルに襲い掛かった。

「っは、武器を持っているとは名だけの下郎共が…」

ローレルはそう言うとは何時の間にか持っていた杖を振り上げた。

「僕程度に倒される恥を教えてあげますよ」

そう言った瞬間、掲げた杖が目映い光を放った。

「な、んだ!？」

「……」

ディオスも、奴等も其の眩しい光に目を開けていられなくなった。ディオスが次に目を開けた時は驚くことに奴等は全て其の場に倒れていた。

「…な…」

ディオスが小さく声を上げるとローレルはディオスの近くに来た。

「大丈夫ですよ、気絶しただけです」

「いや…そうじゃなく」

流石のディオスも突っ込まざるを得なかった。

其れを聞いてローレルは首を傾げる。何のことがよく分からないらしい。

「御前…見かけに寄らず強いんだな」

「いえいえ、僕が強いんじゃないやありません。此の屑共が弱いだけですよう、ディオスさん」

其れは、完璧と呼べるような、笑顔だった。しかし、其の裏には物凄いどす黒い物が渦巻くのをディオスは其の目で確かに見た。

その笑顔を見てしまったら、どうやって倒したのか、何て聞けなかった。おそらくはレイの楽園の者には皆そなわつてゐるほにゃららという力ですよーとかいうに決まっている。ディオスは勝手にそう結論付けた。

そして、コイツは見た目が真っ白で天使のようでも実は相当真っ黒…と認識しなおい、路地裏から出ることにした。

こんな奴等がうるついているとフィルティーンも知ったら、もう此処から出ているだろうと思ったのだ。

路地裏から出るまでの間、ディオスはローレルが敵ではなくて良かったと思っていた。

伍 時計塔

「はあ…」

ディオスは小さく溜息をついた。一向に見つかる気配の無いフィ
ルティーン探しに希望を失いかけているのである。

もう、街にはいないのでは…と思い始めていた。同じく、ローレ
ルもそう思い始めていた。

「いない…ですね」

人に酔ったのかローレルは少々低めの声のトーンでディオスに話
しかける。ディオスもまた、最初の活気は既に無く、疲れきった、
そんな感じである。

「もういないんじゃない…と思っていた」

「僕もです…」

二人は顔を見合わせて同意する。其の後二人は無言で頷きあい、
此の街から出る事にした。

そんな事を決めて、再び歩き出そうとした時だった。振り返った
ディオスの足に、小さな衝撃を感じる。生暖かい柔らかいものを蹴
った、そんな感じた。

ディオスは犬か猫でもいるのか、悪いことしたな、それくらいに
しか思わなかった。其の正体を見るまでは。

「いたーい…です」

結論、其処にいるのは犬でも猫でもなかった。其れは小さく高い
声を上げた。

「…!？」

「……!!」

ディオスは其れを見て吃驚した。何故かローレルも其れを見て固まっている。

「…何をする…ですか…!」

更に言えば、其れはニンゲンでもなかった。

ディオスの近くにいるローレルと、同じと言ってもいいほどに真っ白な少女だった。さらさらとしたストレートのロングヘアに白く大きな瞳が何とも愛らしい少女である。

おそらく、コイツもレイの楽園のものだろうとディオスは推測する。

「……ああ、すまん」

ディオスはそうそっけなく言うと、さっきの衝撃で倒れてしまった少女に手を差し伸べた。

「……」

少女は其の手とディオスを交互に睨みつけるとおずおずした手つきディオスの手をとった。

軽やかに立ち上がった少女は身なりを整えると、改めてしオスに向かい直る。

「……まあ…いいです。貴方…悪い人ではなさそうですし」

少女はそういうと、一歩前に踏み出してローレルを見やる。

「……!」

「で。貴方は何をしていますのです?ローレル…!」

ローレルよりも頭一つ分以上小さな少女にローレルは何か怯えたように裏返った声ではない!と叫び声のような声を上げた。

「……………」

ディオスは其れをちよつと観察することにした。

「わ、わたつ…私は…迷ったフィルティーン様を…」

「逃げたのではなくて？」

「…お、お逃げになられた…フィルティーン様を…」

「貴方がぐずぐずしているからドールに助けを求めた…ですか」

「……ドール…？」

そのときディオスは思わずと言ったように繰り返していた。

「……ああ、ドールとはここに住む人々のことを、僕達はそう呼んでいるんです」

「あ、そう……」

つまりは神の人形ということか、そうディオスは納得すると、再び少女に目を向ける。

「そういえば…御前、何者？」

「ん？」

ディオスの疑問の声に少女は振り返った。ディオスを目にいれると直ぐに少女は慌てた様子でディオスに頭を下げた。

「ご、ごめんなさい！紹介がまだでした、ね？私はフィルティーンの双子の妹、ティリスと申します」

「オレはディオス…って双子？」

「ええ。ローレルの愚図があんまりにも遅いので。私も降りてきたんです」

「ぐぐ、愚図って酷いじゃないですか！」

「愚図に愚図っていつて何が悪いんです？ローレルサン？」

其の言葉にローレルは返す言葉もなくなったらしい。うぐつと言葉に詰まった。

ディオスは其の光景を半分他人の振りをして見ていた。しかし、其れも長くは続かなかった。

「うわああ！本当酷い！ですよねえ？ディオスさん！！」

「…は？」

「ディオスさんもそう思うでしょう！？」

ローレルはいきなりディオスに話を振ると、ティリスから目を背けてディオスに泣き付いた。

ディオスは其れを呆れたように見ながら、取り合えず暑苦しいのでローレルを引き剥がすと、

「はあ…」

「ただ、溜息つかないでくださいよ！悲しくなるじゃないですか僕が！」

「悲しいのは何時も…では？ローレル？」

「ああ、ティリス様までやっぱり酷い！」

ローレルは其の場に膝を付いて泣き崩れたようだった。噓泣きにも見えるローレルをディオスは見下げながら、もう一度深く溜息をついた。

そして、其のまま腰を折ると、

「ほら…そんな所で泣いてんじゃねえよ。さつさと…フィルティン探そうぜ」

「……ディ、ディオスさあん！！」

ローレルは差し出された手を取ると感動したように満面の笑顔で立ち上がった。

「やつと復活ですか。本当、ローレルはとろいです」

ティリスは復活したローレルに一言、そっくり残すと、「其れでは…私はもう帰ります。お兄様は、貴方が探してくださいませ。やっぱり私は…ミイはちよつときつ過ぎます」

ティリスはそういうと次の瞬間姿を消していた。

どうやらレイの楽園へと帰ったらしい。

「……ん？つか…」

「如何しました？ディオスさん」

「……ティリスが言ってた『ミイ』って？」

「ああ…此の世界のことですよ。此の世界の総称です。レイの樂園ではそう呼びます」

「……そう」

ディオスはやっぱりレイの樂園は近いようで遠いんだなあと、少し感じながら再び再会しようとした時だった。

二人が一步、前に出た瞬間。ゴーンゴーンというとても大きな音がした。

「なな！？なんですか!？」

ローレルは其れを知らなかったからか、物凄く驚いていたが、ディオスは其れがなんなのか、理解していた。

「神託だ…」

「え…？」

「神託の鐘。ほら、通りの先を見る」

ローレルはディオスに言われたとおり、一本の大きな通りに先を見てみた。

其の一番先の、突き当たりには然程大きくない、素朴な塔が立っている。よく目を凝らせば、其の鉄片のテラスのような場所に、鐘があつた。おそらく其れの音だろう。

「あ…それは？」

「神託が下されるときにアノ鐘を使うんだ。あの塔は時計塔って呼ばれてるんだけどな…」

「時計？」

「鐘塔でいいじゃんってオレは思っけど…。何だか…聖地の奥と此処の時間の流れは違うとか言われててな。其の時間壁を越えて聖なる人は聖地の奥へ進む…こんな感じから時計塔って名づけられた

らしい」

「そうなんですかー。別に流れが違うつてわけでもないんですけど…レイの樂園は…」

ローレルはそう言うと言った。ディオスの手を引いた。

「さあ、早く行きましょう！時計塔へ！」

「はあ？！何でまた…」

「何ででしょう…僕、あそこに行かなくちゃ行けない気がするんです…」

「其れは…どういう？」

ディオスは顔を顰めると、ローレルはうーん。と唸って手を組んだ。

「…何ででしょう？唯…力を感じます」

「……力？」

「微力ですが…魔力ですね」

「魔術師のじゃないのか？」

ディオスはそういうと辺りを見渡した。

人通りの多い中、魔術師も勿論、他の人に紛れてせわしく歩き回っている。神託が始める合図の鐘が鳴ったのだから、人々がそわそわしていて当たり前で、同じく魔術師がいるならローレルの言う力、を感じても当たり前はずだ。

ディオスの言いたいことを理解したローレルは違うんです、と首を振ると、

「何だか…懐かしい感じがします……」

「懐かしい…と言うことは…」

「もしかしたら…フィルティーンさんのものかもしれません…！」

ローレルはそういうと走り出していた。人を掻き分け、時計塔へ向かう。

其の後を、ディオスも追った。

「って…速えよ…!!」

人が多い中、何でそんなに速いんだ!とディオスは小さく呟くと、ローレルを必死で追う。

しかし、途中で一瞬、ローレルを見失ってしまった。

「まあ…時計塔で…あいつも待つてるだろ…」

ディオスはそう思うと時計塔に走り急いだ。

時計塔に着くと、ローレルは時計塔の門から少し離れた所で立ち往生していた。

「如何した…」

「……中から…力の気配がするんですけど…」

ローレルは小さく呟くと門の方を指差した。ディオスも其方に目を向けると、其処には人が二人、門の前に立っている。

「ああ……門番か…」

「そうなんです…入れないんです…」

「神託の日だからな…何時もは入れるんだが…」

「ディオスさん!何とかして下さい!!」

「そういわれても……あ」

ローレルに打開策を求められ、ディオスも思い浮かばない、そう思ったときだった。

ふと、ディオスは一つの策を思いつく。

「なんですか!?!」

ローレルは食いつくようにディオスの服を掴んだ。

「一つだけ…あつた……」

ディオスはそういうと、再び門番と、時計塔を交互に見た。

其れが、時計塔の中を確かめる、唯一の方法だと、思いながら。

陸 聖なる純白の光

ディオスの言う時計塔に入る、唯一の方法とは結局のところ、不法侵入となんら変わりなかった。

タイミングが重要な方法な為、ディオスはローレルに手短に話した。

其の方法とは、まず門番は神託が下される前に、其の扉を開けるのだと言う。時計塔に神託を受けた者が通るためだ。

扉は其の前に開けておく必要があるらしい。

其れから神託が下される。即ち、其の間、民は神託が下される空を見上げる。

神託は、空から降り注ぐ光が其の者を導くのである。

民が空を一齐に見た瞬間。其処に時計塔に入るチャンスがある。

其の時は門番も、神託を見届けるため、少なからず時計塔から離れるのだ。

出るときはどうかと考えたものだが、そういえばローレルが現れた当初、いきなり出てきたことをディオスは思い出した。ローレルに問うと、それは簡潔に言えばレポートらしい。

ならそれを使うことにし、入ったら直ぐに確かめ、ローレルの魔術でレポートして逃げる。

ディオスの立てた計画はこうだった。

因みに最初にレポートして入らないのは、門番に気付かれる所為である。

出る時は神託を受けた者が神託と同時に聖地に入る為の印、つま

り魔術的な施しを受ける。だから其方の物と思われやすい。そうデイオスは考えたのだ。

実質ローレルはレイの楽園の者であり、その魔術は印の魔力と近いものなのではというのがデイオスの見解だ。

「でも…其れは…リスクが高いですが…」

「だって…もしあんにフィルティーンが居た場合、見つかったら即捕まるぞ？」

「……………」

「逃げようにも牢屋は魔術は使えなくしているそうだからなー」

「判りました。帰れなくなったら困りますもの、ね。僕がどんな刑を受けるか…考えただけでぞつとします…」

デイオスの言葉で色々と想像したらしいローレルは其の提案にやつと首を縦に振った。

「はあ…まあ、此れで行くか」

ローレルの言う刑がどんなものなのかデイオスは判らないが、気にしないことにした。

そうして居るうちに、暫くの時が経ち、町の人々はざわめき始めた。

其の声や足音に紛れて、何かがこすれあう音がする。

時計塔の重たい扉が開き始めたのだ。

「ローレル…！開き始めたぞ…！」

「…………ええ。判つてます。やつと、始まるのですね…」

二人は短い言葉を交わしあい、開かれる扉を見つめた。

ガコンと、ひときわ大きな音を立てて、扉は開ききった。開ききった後、門番は其処から少し離れて時計塔に祈りを捧げている。

「もう直ぐ…だな。いいか、後数分だぞ…」
「ええ、判ってます」

祈りを捧げ終わった門番が時計塔に背を向けると、町の人々のざわめきはいつそう増した。皆が皆、時計塔を見つめている。今か今かと言う心の声が聞こえるようだ。

自分が選ばれるよう祈る者、選ばれた者を一目でも見ようとする者、其処には其々の思いを抱いた人々が溢れ返っていた。

其の時だった。

人々のざわめきが一瞬にして静まり返る。

人々も、門番も、空を見上げたのである。まぶしいくらいの白い光が降り注いでも、不思議と目を瞑らないで居られた其の光は、初めは四散していた。

しかし、其の光は徐々に細くなっていく。

「あの光の中に…最後まで居たやつが…聖なる人、だ。さあ、行くか…！」

「…ええ、其れは判るんですが…」

「如何した？」

「僕も入っているんですが…光の中に…」

「近くに居るんだろ、聖なる人が。其れにまだ光は広範囲だ…今のうちに…！」

「そうなんですか」

「さあ、早く、行くぞ…！」

ディオスはそういうと、ローレルの手を引いて立ち上がった。

其の間にも、光はどんどん狭まっていく。

其の速さは意外と早かった。既に光の大きさは時計塔を含む、百数十人を含むのみとなっている。

「……ち。なんなんだ……」

ディオスはそういうと立ち上がったまま歩こうとしなかった。其れを不審に思ったローレルは声をかける。

「どうかしましたか……?」

「ちくしょう……かなり……聖なる人が近くに居るらしい……な。まだ光が此処から抜けねえ……」

「確かに……」

「くそ……此れじゃ……相当目立つっ……」

ディオスはそう言うと言唇を咬む。

「えっと……其れはつまり?」

「時計塔に忍び込もうとした瞬間、誰か気付くだろうな……」

「……え……! ええ! ?」

「って大きな声を出すな!」

ローレルはディオスの推測を聞いて、思わず大きな声を出していた。

周りが静かな分、其れは少なくとも少しは響いた。其れをディオスが咎める。

しかし幸い、気にする人は居なかったようだ。

「此処で動いても……目立つただけだな……。仕方ない。後はフィルティーンが……其処にいないことを祈るか」

「そ、そんな無茶なー!」

こそこそと話す続ける二人。其の間にも光は細くなっていたが、一向に二人が光から出ることは無かった。

「……」

「あの、聖なる人は……物凄くお近くに居るんですね……」

「いや、変だぞ、コレ……」

ディオスはそういうと、一つ思い出したように言った。

「済まない。一つ見落としてた…」

「はい？」

ローレルは顔の見えないディオスを覗き込むようにして聞いた。何のことか、分からないらしい。

無理も無い、ディオス自身、其の可能性を見落としていたのだ。

限りなく低い確率なら、無視して良いと言う安易な発想が時には最大の欠点を生むと言うことを、ディオスはまざまざと見せ付けられて気分だった。

「…此の作戦は…聖なる人が…」

ディオスがそう言った時だった。

ふいに人々の声がした。其れも結構大きなものだ。

其処で漸く理解する。やっと、聖なる人が決まった。

「…聖なる人が、オレになる可能性…抜きで考えていた」

「と言うことは…もしかして…」

ローレルも決まった今となつては、ディオスの言葉を聞いた今となつては何故、作戦は失敗したのか分かっていた。

其れは、

「今回は…オレが…聖なる人、らしい」

ディオスは眩しい位の光を浴びながら、しかし不思議をまぶしい素振りを見せず、其処に立っていた。

ディオス自身、何故選ばれたのかも分からない。ましてや、ローレルも今の状況に追いつけて居ないのか、開いた口からは何も紡がれることは無かった。

ディオスとローレル、お互いなんて声を掛け合ったらいいのか分

からなかった。

代わりに、人々の声は絶え間なく続いていた。

漆 白にとって大切な

「ちくしょう…」

ディオスは周りに聞かれない位の小さな声で呟いた。

ディオスの左右には二人、体格が良く背の高い男性が槍や剣を手に持ったり腰に下げたりして居る。

まるで其の二人はディオスを護っているように思われる。実際ディオスの警護の為の人ではあるが。

しかし、本来、ディオスは警護をして貰える程地位は高くなく、全体的に見ると貧しい暮らしをしている部類に入る。

――… 実際街外れの… 丘の上に住んでいるし…――

勿論、警護を雇えるほどお金の余裕も無かった。

そうであるのに今、警護がつく理由は、今から十数分前に遡る。

（何でこんな面倒臭いことに…！）

其れは、聖なる人が決定した其の時だった。

聖なる人は世界で唯一人、聖地の奥へと足を踏み入れることが出来る、特別な人間である。

其の人が決定した。其れを見届けた人の歓声は酷く壮大なものだった。

そして、無常にも其の決定が、ディオスが編み出したフィルティン搜索の作戦を見事にぶち壊したのである。

「ま、さか…オレが…？」

本当に微塵も自分が信託で選ばれると思っていなかったディオスは半ば混乱気味だった。

もつと他に適任は沢山いる、そう何度も何度もディオスは思考をめぐらせた。

一方隣に居るローレルも何て声をかけたらいいのか、分からないらしい。ただただ光に包まれるディオスを見ている。

「……すまない、本当に…作戦が……」

「い、え……。其れは…だ、いじょうぶ…で、すが……」

ローレルも声が途切れ途切れで、如何やら状況を性格に把握できないらしい。大丈夫ではないはずなのに大丈夫と言ってしまうている時点で重傷である。

事実として受け止められても、理解力が付いて行かない、そんな状況である。

目はうろつろと宙を彷徨っていた。

やつとのこととで出た言葉は、「万に一つにでも…こんな可能性は無いと…？」

此れを聞くのが精一杯だったらしい。

なんて顔してんだよ、普通のディオスならそう言っただろう表情をしながらローレルが聞くとディオスはこくこくと頷く。

何処かローレルの声は震えている気がした。とても衝撃的だったのだろうか。ディオスはそんな事を思いながら答える。

「そもそも可能性として考える方が…馬鹿げていると」

「…ですよ、ね…ディオスさん、信仰…とかしていなさそうですもん……」

ローレルは、はははと乾いた笑い声を漏らした。声だけでたよう

な笑いをローレルが浮かべていると、体格が良く背の高い男性二人が近づいてくるのが見えた。

「あれ…は？」

ローレルが近づいてくる二人を見つけてディオスに聞いた。ディオスは其方に目を向けて、ああ、と相槌を打つ。

「あれは警護だ。おそらく…オレの…」

「………ということは…」

「時計塔に入ることになるな、オレが」

「………」

「大丈夫だ。あいつ等に見つからない様に、フィルティーンは見つける」

だから心配すんな、ディオスは優しく安心させるようにローレルに言った。

しかしローレルは俯いてしまう。ディオスは其の姿を見てどうかしたのか、と声をかけようとした時だった。

「貴方ですね？」

「聖なる人」

男性二人がディオスの前まで来て確認を取った。ディオスは二人を見上げるような体勢で其の言葉に肯定する。

「大変済みませんが、お供の方はお連れ出来ません。少々お待ちを」

そう言つと男性二人はディオスを誘導して時計塔へ足を向けた。

「ローレル、ちょっと待っていてくれ、な」

ディオスは一言言い残すと二人に連れられて時計塔に向かった。

ローレルは一人残されたまま其の場に縮こまっていた。

力が抜けたように顔を膝に埋める。其の体勢のまま溜息をつく、よりいっそう縮こまったように見える。

「まさか……」

ローレルはぽつりと声を漏らした。

「……本当に……彼が……」

ゆっくりと身体を起した彼の表情は何処か冷たい。白い肌はよりいっそう青白く見られる。

「……ディオスさん。神の審判に選ばれし者は……此方にとっては……いえ、王子にとつてはとても……重要なんですよ……」

もう姿の見えなくなつたディオスにローレルはぽつりと呟いていく。誰もその言葉を聞き取るものは居ない。

「彼の行く末を決める者、審判によつて罪を洗い流す曙光……今度は……今度の最期は……何が……待っているんでしょうか……」

ローレルの問いに答える者は居ない。

ローレルの視線の先にはと系統に入るディオスの姿が見え、そして其処には唯、ディオスを包んでいた光の残存が其処に残っていただけだった。

ローレルを残してディオスが連れて行かれるのは時計塔の最上階である。

といつても然程高い塔ではなく、上るのも螺旋階段である。

「はあ…長い…」

「決まりですので、ご辛抱を」

「…あ…い、いや…済みません…」

早くも時計塔に入り、螺旋階段を見ていたディオスは思わずいったように呟いただけだった。

でも、其の言葉を注意深く聞いていたらしい護衛の二人のうち一人は律儀にもディオスの呟きに答えた。

（反応しないでいい…反応されるとこっちが情けなくなる…）

一つ気付かれないようにため息をついたディオスは、螺旋階段から目を離すと中を見渡した。

ひんやりとした空気が立ち込めていた。

塔と言うには乏しい広さだった。

中は何にも無く、所々に蝋燭や絵画が飾ってあるだけだった。

こんなところに隠れるスペースは無い。ディオスはそう確信すると螺旋階段を見上げ、

「行こう…」

自分に言い聞かせるようにして言った。

多分、これをフィルティーンが知っていたら、面白そうに笑うだろう。

少しの間しか一緒にいないが彼の性格がつかめていたディオスはそう思った。

確信は無い、唯の勘。

全く素性の知れないヒトのことなのに、何時の間にか放って置け

なくなっている事を軽く嘲笑しながらディオスは螺旋階段を上り始めた。

会話の無い螺旋階段は、そんなに長くなくても、上り詰めるには感覚的にはとても長かった。

着いた頃にはディオスは精神的には疲れていた。

捌 失くしていた探し物

ねえ、また僕は…見られなかったのかな。

記憶に残る、幼い少年はそういつて涙を流しながら優しげに微笑んだ。

その涙はとても切なく。

微笑んだ少年の表情の奥は痛々しかった。

何かしてあげたい。

寄り添う彼はそう強く思うけど、何も出来ないのは必定で。

ただそれが身を切られるよりもとても悲しい。

何を、とは、少年は流石に言えなかった。

十
十
十

時計塔から見える景色ははつきりいつて絶景だった。

元々水路が多い所為か、きらきらと太陽の光を受けて水面はきらきらと光り、町全体が宝石箱か何かのようだった。

そして人々は上を見上げて歓声を上げる。

どこかの国の王にでもなった気分になりながらディオスはゆっくりと後ろを振り返った。

「で…オレは。何をすればいい…」

まさか自分が聖なる人になるとは思っていなかったディオスは面倒臭そうに聞いた。

二人もディオスの護衛についている中、フィルティーンを探すのは困難に思えた。

（本当、面倒臭い…）

ただ時計塔で済ませること、それさえ教えてもらえればディオスは護衛なんていらぬのに。

そう思いながら返答を待った。

するとすぐに一人が自身の後ろを指差した。

「…？」

「ここに更に上へと続く階段があります。ここより先へは一人で行って頂く事になります。そこで、正式な神託を、神より受け取ってください」

そついうと二人は頭を垂れた。

「……」

ディオスはそちらへと目を向けていたが、直ぐに視線を逸らして、彼等の言う階段へと足を向けた。

階段を上りながらディオスと思う。

どうして、こんなことになったのか。

何もかもくだらないと思っっているはずだった。

神託なんて、受けるつもりも、従うつもりも、無かった。

例え選ばれたのだとしても、くだらない世界の決めたルールなんか縛られるつもりは無かった。

それなのに、今、こうしてここにいる。

それは、彼の心にある感情と相違していた。

「…… どうして…俺今こんなことしてんだろ……」

彼の問いに答える者はいない。

逆に、自分でも分からない答えを答えられる者がいるとも思えなかった。

一番、知っているはずの自分でさえ出せない疑問。

どこかネジが抜けてしまつて壊れてしまつたように、今、ディオスは自分が分からない。

それは、ずっと前。捨ててしまった「心配」という感情を抱いているのに気付けないまま、ディオスは階段を上りきった。

そこは、下で見るよりも綺麗な町並みが広がっていた。

ディオスからは町がともよく見えるが、下の人々にはおそらくディオスの姿は見えていない。

ディオスからも人々は見えなかった。

上の様子が見られないよう、巧妙な造りをしているらしい。

そこには太陽の光もとても届いていて、さらに風が少し穏やかに吹いていて気持ちいい。

前のディオスなら何とも思わなかっただろう景色は、今のディオスにはとても綺麗だと感じた。

それにディオス自身気がついていた。

いつ、自分は変わったのだろうか。

そう思うと一つ、思い当たる節があった。それは。

「フィルティーン…お前に会ってからだ……」

それは、ずっと見失っていた、一つの答えだった。

そして、それをディオスが呟くように言った瞬間、ディオスを優しく撫でていた風は変貌し、強い風が辺りを巻き上げた。

「…っ！」

ディオスは飛ばされないように近くにあった手摺に掴まる。辺りを風が巻き上げ、眩しい位の太陽の光が集まって一つの形を

形成する。

「……！！」

光が徐々に強さを失い、風が穏やかに戻ったとき、静かに目を開いたディオスの瞳に写ったのは、紛れもない、彼が先刻呟いた名前の人だった。

「…フィル…ティーン…か？」

ディオスは確かめるように言うと、フィルティーンは別れてから寸分違わぬその格好で言った。

「そうだよ…他に誰に見える？」

「……いや、誰にも。そもそもそんな目立つ格好、誰もいないし」

「…あははっ言うと思った！」

ディオスの冷静な判断にフィルティーンは予想をしていたらしい。的中したのを見てけらけらと無邪気に笑った。

不思議なことに、その光景をディオスは優しげな表情で見つめていた。

今までの彼ならありえない行動だった。

ひとしきり笑ったフィルティーンを見て、ディオスは言った。

「…探したんだぞ、お前を」

「うん…」

「どうして、お前がこんなところに…」

それはフィルティーンが現れてからずっと思っていた疑問だった。上に行つて神により正式な神託を受ける、それがディオスのやるべきこととなった。

それなのに、上にいたのは探していたはずのフィルティーンだっ

た。

考えなかった可能性はあった。
でも、それは即座に否定された。
ありえない、とディオス自身思っていたのだ。
なぜなら、正式な神託を下すのは、ほかならぬ神自身だ。

それなら。

「…お前が…神って…ことになる…!!」

どうしても、信じられなかった。ただ少し、フィルティーンは不思議な人だと思った。

いつの間にか世界なんてくだらないと思っていたディオスの心を変えていた。

今、全くくだらないと思っていないとは言えないにしろ、人のことなんてさらさらどうでもいいと思っていたディオスが人に自ら関わった、それだけでも凄いことだった。

それをやってのけたのはフィルティーンだ。

少ししか一緒にいなくても、話さなくても。警戒してささくれだつていた心に優しく触れて、相手が気付かないうちに打ち溶け合ってしまう。

それがフィルティーンの性格、そして心なのだろう。

神だとしたらなんでもできる、そんなのはわかりきったことだ。けれどきつとフィルティーンは神でなくても相手を優しく、そして暖かに変えることが出来る。そんな確信をディオスは抱いている。

だがしかし、普通に冷静に考えればフィルティーンが神だという考えは即座に否定されよう。

普通、神が、一介の人間と関わること自体ありえない。
神は至高の存在。

人の世界に下りてくることは絶対にありえないのだ。

「……言っただでしょ？僕は逃げていた」

「……」

「先に視える未来が変わらないものなら。嫌だった」

「……」

「……ねえ、知ってる？天使って残酷なんだよ？」

「……」

「……細かく言えば、僕は真の神ではない」

「……？」

フィルティーンを見上げれば、彼は少々俯いていた。

ディオスは何も言えなかった。

「……真の神は、此の世にはいない。……本当は、僕たちがなるはずだった」

ディオスの表情が僅かに変わる。

「神と呼ばれるのは、僕だけじゃない。他に三人いる。称して四伝説って呼ばれてる」

話すのはフィルティーンばかりだった。

ディオスは沈黙を脱そうとしない。

「本来神となるべくして生まれた魂が四つに砕け、それぞれ確立

した自我を持つて行動を始めた。それが僕たちだ」

それは途方もない話だった。聞いても信じられなかった。

「これを聞いて、君は何を思う？」

「……？」

ディオスは何を言われているのか分からなかった。

ただただ眩しい位の光に包まれているフィルティーンを仰ぎ見る
ことが出来ただけだった。

玖 涙と笑顔（前書き）

最終話です。

玖 涙と笑顔

何故。

それは疑問だった。

如何して。

答えるものは誰もいない。

何時から変わったのか、それとも、元々隠れていたものが見えていただけだったのか。

分からない。

何も。

彼は何も知らない。

何を思う。

フィルティーンはそう言った。

ディオスは俯いていた顔を上げてフィルティーンを見る。

其の表情は、今まで見た中で、信じられない程切ない表情だったと思う。

如何してどんな表情をしてディオスを見るのか。彼には到底分らない。

其処には言葉で表せない程の様々な感情が渦巻き、複雑に絡み合っている。

何となくだが、そう思えた。

「何を…って……」

何か、言ってやらなければ。ディオスはそう思ったが、肝心な言葉は頭に思い浮かばない。何も思い浮かばないまま一生懸命考えながらディオスは一つ、深呼吸した。

フィルティーンは言葉を求めているのではない。

求めているのは、思うこと。つまり気持ちだ。

ならば先刻答えが出ているではないか。

「済まないが…フィルティーン。俺は…なんとも思わない」

「……え…？」

「仮令、それが本当の話だとしても…俺は、別に何も思うことはないと言っただ」

ディオスは顔を上げて、フィルティーンに語りかける。

フィルティーンは目を見開いてディオスを見ている。

色素の薄い瞳がディオスを捉えている。

吸い込まれそうなほど、透明だった。

「…お前が神だったとしても、罪人だったとしても…結局それがなんなんだ？唯、此処に存在している。それだけじゃないか」

そう。

世界に存在するものは須らく、其処に在るだけだ。

形式なんてものは結局後につけた装飾品でしかない。

——きっと。

ディオスは其れをくだらないと感じていた。

初めはきっと、そんなくだらないものでもディオスは追いかけていた。

父も兄もとても立派に戦った。祖国の為、懸命に。もう一度故郷の地を踏めると信じて。

其の姿に憧れていた。

だが、其の装飾品がディオスから父を、兄を、奪った。

装飾品さえなければ、ディオスは今でも家族全員欠けることなく暮らせていた。

軍人。

その装飾品が父と兄を戦場に赴かせ、そして、奪っていった。

思えば其の頃からだった。
ディオスが変わったのは。

ディオス自身、変わったと自覚はしていなかった。
しかし、今では断言できる。

自分は変わった。

其れを気付かせたのは。

「フィルティーン。お前が…教えてくれた」

「……」

「お前は…相手が誰でも、そして自分がなんだったとしても…自分を見失うことなく…接することが出来た」

仮令、相手が自分だとしても、何一つ態度を変えることなく、接することが出来た。

相手が自分より低い位でも、自分の事情に巻き込みたくない、そう言うて使うことをしなかった。

そしてそれがフィルティーンの心の本質のようなものなのだろうか。

人に不快感を与えない丁度よい距離を保って、気持ちよくいつの間にか話せるようになっている人柄を持つ。それがフィルティーンなのだろう。

「きつと。俺は其の心に惹かれて…関わったんだ、自ら。自分でも気付かないうちに、こんなに…人を心配したのは初めてだ」

心配していながらも、何時の間にかたった一人の家族にさえ素っ気無く接してしまうようになっていた。

「感謝している。きつとこれと思うこと、だろう。でも、やっぱりお前の望む答えじゃないのかもしれない。それでも、これが俺の本心だ」

そういつて、ディオスはふつと笑った。

変わってから、初めて見せた、本心の笑顔。

さらさらと滑っていくように柔らかな表情、それに見惚れていたのか、言葉に驚いていたのか、フィルティーンは唯ディオスを見つめていた。

「だから、俺はお前を神だとか知っても、だからなんだ？って話なんだ。別に、神であろうとなかろうと、そこに宿る心は変わらないと思うから…」

「…そ、う…。本当に？」

フィルティーンは何時の間にか俯いていた。ディオスはフィルティーンを見るが、その表情は伺えない。

フィルティーンはディオスの言葉を聞いて何を感じたのか。ディオスには到底分らない。

「何だ？…違う、やっぱりお前を敬うよって言うて欲しいのか？」
ディオスはころりと態度を変えて、いきなりフィルティーンの前に跪き、フィルティーン様ーとか言い始めた。

それを聞いた瞬間、フィルティーンはぷつと吹き出したような声を出した。そうくるとは思わなかったと笑いながら、ディオスの前に降り立つと、いきなり抱きついた。

「う、わ!？」

その勢いでディオスは後ろに倒れこんだ。

「…有難う…本当に、有難う…!ディオス…!」

そう言ったフィルティーンの声は震えていた。

ディオスは抱きつかれて倒れたまま、フィルティーンの頭を撫でてやった。

「泣きたいなら、今のうち泣いておけ。俺の気が変わる前に」

何故泣いたのか分からない。お礼を言われた理由も分からない。

起き上がらせることも出来ないまま、ディオスはフィルティーンを宥め始めた。

それから、フィルティーンは自分のこと、聖なる人について話し始めた。

「僕…は。実は人口神に近いんだ」

ふと、思い出したような感じでフィルティーンは言う。

「え?」

「もう、遠い昔。神が忘却されていたとき…。失われた力を修復しようとして新に魂を得た。つまり…転生。そして…最初は良かった。僕達は一つだったんだ。でも、神になる前…神になるべくして生まれた魂が狙われたのか…それともそういう運命だったのかは分からない。でも、四つに分かれてしまったんだ」

「……四つに…もしかして…お前はその一つ…？」

「そう。でも、四つに分かれた一つ一つは不完全で…そのままでは神になることは出来ない。ましてや、分かれてしまった…神になるはずだった魂を修復できるものなんている筈がなかった」

そのための人口神。

仮初の力で祀り上げられた偽者の神。

「それが…お前つてことか…」

「そう。僕達は神でいて、神で無い。誰かの手によって作られた…人と同じで強大な力を保有する不安定な存在…」

ローレルたちレイの楽園の者は、フィルティーンが生まれるもつと前…世界が創造されたときからいた未知なる存在、神によって作られた者。

神の力の一端を繕って生まれた、神の力の一部を保有する純血種。しかしフィルティーンたち仮初の人口神の力はレイの楽園の者さえ量がうつるほどだという。神となるべくして生まれた魂は仮令四つに分かれたとしても強大だと言う事を再認識させられた。

しかしフィルティーンはレイの楽園の者によって繕われた者。そして人は、人口神の力によって作られた者。

どちらも作られた者から作られた、非常に良く似ている者達。

「だから…僕は…人に簡単に殺されてしまう。レイの楽園の者は神の力の一部を保有する、人よりも上の者達。だから…その圧倒的な力の前に…レイの楽園の者を倒せる人間はいない…」

作ったものは異なっている、作られたという点では同じ、つまり同じ条件だから、フィルティーンは人間でも殺せてしまうらしい。

「僕は…聖なる人がここに来るたびに…会って来た。それが、僕の役割だったから…。でも…だんだん…時がたつにつれて、人の心は廃れてくすんでいった」

「……」

先は、敢えて言わなかった。

何度、その力を手に入れようとした人間達にやられてきたのだろう。

きつと、だからフィルティーンは聞いた。
どう思っのか、と。

これから自分に起こるであろう事を確かめるために。
今度こそ、生きられるのかという不安。

「僕は人を作った神だから。植木鉢の植物を手折ることは出来ても枯らすことは出来ない…。攻撃できても殺すことは出来ないんだ…。それが世界の理だから」

其の度に、フィルティーンはレイの楽園の者によって転生させられた。

朽ちた肉体を捨て、奪われた力が回復し転生するまで眠って。

「結果。僕は生きることを許されないのかと思ったこともあったよ…。力を持つ者を恐れる人間は…僕を罪人にして其の力を奪っていった。何のために殺されて、転生させられて…そんな理由が分からなくなってきた…。でも、それでも。微かな光を求めて…転生を繰り返した」

フィルティーンが振り返る。
ディオスは其れを見ていた。

「でも…やつと。見つけた」

再び、フィルティーンはぽろぽろと涙を流していた。

「本当に、ありがとう。これでやつと…前へ進める…」

「ふー…疲れた」

時計塔から出てきたディオスは開口一番そう言った。

「な、何さ！その言葉！」

半透明のフィルティーンはぼかぼかディオスを叩く。

実は、フィルティーンは最初から、肉体が無かつたらしく、聖なる人に受け入れられて、その信仰心を借りて初めて肉体を手に入れられるらしい。

今まで普通の人のように接していられたのは、ローレルたちの目

を惑わせる為であり、人に紛れる為であつたから、自分の強大な魔力を使い、擬似肉体を形成していたらしい。しかし、逃げ必要も無くなった今、その魔法は解いているということだ。存外魔力を使うため疲れるらしい。

ローレルは、聖なる人が正式に決まつた今、急いでレイの樂園へ報告に向かつた、と言つていた。

それはもう、酷い喜びようだったので、ちゃんと報告できるのか？と不覚にも思つてしまつたディオスである。

「さて！さつさと行くよ！いつつもみんな巡礼行つたことにしてサボつてたんだから！」

「……」

サボつていたのかそれとも何か別の理由か、真偽は兎も角何でもこいつこんな元気なんだ？とディオスは思いつつ、「はいはい」と気の抜けた返事する。

巡礼よりもまだ先に、ディオスは教会への報告をしなければならなかつた。

報告をし、加護を受け、そして巡礼へ旅立つ。
たった一人の家族にも、報告しなければ…

沢山やる事が出来たな、と思いつつディオスは小さく笑つた。

f i n .

おまけ

「なあ、」

「ん？何？」

「お前逃げてたのに、どうして時計塔に現れたりしたわけ？俺が行ったときだよ」

「ああ…だつて。分からないの！？君だからでてったんだよ。もしかしたら…って。賭けだった」

「……じゃあ別の人だったとしたら？」

「勿論逃げてたよ」

「……へえ」

玖 涙と笑顔（後書き）

「神の追憶楽曲」これにて最終話です。

読んでいただいた皆様、有難う御座いました！

かなり前から暖めていたお話の派生の物語だったのですが、何とか書き終えられて良かったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5280v/>

神の追憶楽曲

2011年11月12日08時24分発行